

# 初年度導入ゼミにおける「学生ポートフォリオ」の作成とその効果 -- 焦点化ポートフォリオの作成を通して--

寺西 和子

千里金蘭大学 生活科学部 児童学科

## 1 はじめに

大学は希望者「全入」時代をむかえ、大学教育は一昔前までの一部の限られた学生を対象としうるものではなくなってきた。学生の質、学力や興味・関心も多様化してきている。「少子化」「進学率の上昇」の中で、後期中等教育である高等学校の「修了認定」の必要性も論議の遡上に上ってきている現状もある。

こうしたことを背景に、多くの大学では学生への教育に力を注ぎ、シラバス作成も広く行き渡ってきている。初年度導入教育においても、学生を大学の学びへ誘うために教育を実施していくのかということが、課題となってきた。

本学でも、入学初年度のこうした学生を「大学の学び」へ導入するために、少人数による「初年度ゼミ」を実施している。同時に、また、こうした学びを下支えするための「学生用ポートフォリオ」の作成にも関心が寄せられてきている。というのも、大学では必ず教科書を使用することもなく、また、使用した場合も、参考書程度に使われるケースも多い。学生のノート作成もままならない状況も見受けられることが予想される。そこで、半年、あるいは通年のゼミが終了した後、学生の学びが「散逸」してしまい、一年間終了してもなにを学んだのか、まとまりを自覚できないケースも見受けられる。

そこで、本研究では、初年度導入ゼミにおいて、学生の「学びへ誘い」と「自覚化」のための方向づけを目的として「学生用ポートフォリオ」の作成を試みた。とりわけ、その中で「焦点化ポートフォリオ」を含みこむことによって、そのねらいを一層明確にすることができると考えた。それを教員の実践改善のためと学生の目標理解やふり返りのために活用しようとした。

## 2 学生用ポートフォリオと「焦点化ポートフォリオ」のねらい

### (1) 学生用ポートフォリオ

ポートフォリオ評価は、一般に、①学習者の学びの「長期的・系統的な成長」を見とっていくのに有効な評価方法であり、②点数化、数値化しにくい「体験的学び」や「パフォーマンス」（活動的な知性）をとらえるのに有効であり、③学習者を育てるための評価法であるという特色を有している。

特に、学生ポートフォリオには、学習者である学生にとって、「学びの自己管理」「学びの一元化」「学びの持続性・まとまりの自覚化」を促すという働きがある。

ところで、ポートフォリオによる評価は、「形成的評価機能」をもつ「プロセス・ポートフォリオ」と「総括的評価機能」を有する「再構成ポートフォリオ」とに大きく分けられる。

### 学生用ポートフォリオ

①プロセス・ポートフォリオ process portfolio (形成的評価)

焦点化ポートフォリオ focused portfolio

②再構成ポートフォリオ reconstruction portfolio (総括的評価)

こうした「プロセス・ポートフォリオ」の機能をもつホルダーやファイルには、特定の講義やゼミという半期、通年に渡る一人ひとりの学生の学びに関するすべての諸資料(シラバス、配付資料、ミニレポート、ノート、課題、最終レポート、テスト、ワークシート、リフレクション・カード等)がその「内容」(contents)として綴じられている。個々の学生の学びに関する「データの一元化」であり、「自己管理能力」の育成を目指している。そのプロセスでは、学生自身の「自己評価」(reflection)が大きな意味をもつ。

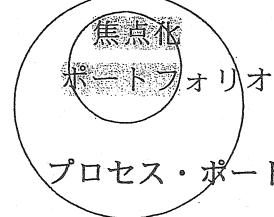
### (2) 「焦点化ポートフォリオ」(focused portfolio)

こうしたプロセス・ポートフォリオの中に、育てたい力を絞り込んだ「焦点化ポートフォリオ」を系統的に組み込んでいくことができる。半期、または通年に渡って継続的に獲得させたい特定のスキルやねらいの形成や深化の過程に絞って、学習者の学びの変容(深化や停滞等)を系統的に追跡し、とらえようとするのに有効である。焦点化ポートフォリオでは自己評価を中心に、教師評価、相互評価を介した「対話」を組み合わせながら実施していくと効果的である。

「焦点化ポートフォリオ」の追究する対象としては、たとえば、教員や学生にとって、「思考の深まり」

「スキルの獲得過程」などが考えられ、それらを把握することができよう。

＜学生用ポートフォリオ＞



### 3 初年度導入ゼミでの実践的研究の枠組み

(1) 児童学基礎演習 1年生 通年(30回)

(2) 初年度ゼミの特色

＜ I プレイルーム体験活動 + II ふり返り(reflection)・レポート作成・対話等  
+ III 文献、課題追究等 ＞ の約10回のサイクル  
(I、II、IIIセットのサイクル)

(3) 焦点化ポートフォリオの分析—「学びの目あて」(goal)の内面化と具体化

大学の授業における「目標」(goal)は一義的で厳格なものは似つかわしくないが、しかし欠かせないものである。シラバスに書かれる目標は、あくまで教員が設定したものであって、それは必ずしも学生自身のものとはなっていない。

こうした教員の側の当初の目標を、学生自身の目当てとして、内面化させ深化させていく過程がとりわけ重要である。1年間のゼミの中での体験活動と「ふり返り」(reflection)を通して、学生の変容をの焦点化させてとらえようとした。「焦点化ポートフォリオ」では、学生と教員との「rubricづくり」の過程を重視し、「ふり返り」と対話の往復作用を繰り返しながら明確にし、学生の成長過程に活用したポートフォリオについて、今回は、分析・報告する。